

松村松年先生追悼の詞

一 色 周 知

松村先生は幼小の頃から既に虫に深い興味を持つておられ、昆虫学者となる運命づけられていたといつてよい。とはいえ先生の学生生活は坦々たるものではなかつた。当時昆虫の研究などで身を立て得るとは一般に思はれていなかったし、学校を転ぜられたり、学資も充分でなくアルバイトをされたり苦勞されたと承っている。殊に札幌農学校の本科に進まる際父兄の希望により土木工科に入られたが、生涯を無生物相手の無味乾燥な仕事に送ることの耐へ難きに思ひ悩まれた後意を決し反対を押し切つて農科に転ぜられてからは一入苦勞されたようであつた。それでも困難を切抜けて明治28年卒業後は順境に入られた。母校の助教授に任ぜられ、32年に歐洲に留学されることとなつた。ベルリンで2年間主としてコルベ教授、ブタペストで1年間ホルバート博士の元で深く研究され、その間に日本のウンカ、ヨコバイ、小蛾及び一般害虫について独誌に発表され、更にイタリアから北アフリカに採集されてその内の新種を帰国後発表されるなど、大きな成果を収めて帰られた。その上に彼地の書を通読されたのでその頃の著書は皆、一般昆虫学、分類学、農業昆虫学の見地から確実な基盤、整つた体系の上に成るもので、学徒には最良の指導書であり、またこれによつて斯学研究を志す者も出た。今日一般に用ひられている昆虫和名のシステムを定められたもこの頃である。台湾総督府の囑託として甘蔗の害益虫を調査されたのもこの頃である。国内各地を採集旅行されて、今日なお重きをなしている標本室を造られ、限られた予算の枠内で図書室の充実のため購入書の選択に心を配られた。研究は頗る能率的で短時日の内に纏められ、外国文のもすらすら書き下され、下書、清書、書き直しなど全くなかつた。比を見ない大量の業績は斯くして成された。それは昆虫の全目に亘るもので、当時先生はどの部類の研究家とも対等に話されると皆敬意を表したものである。講義は教壇上を左右に歩きながらされ、簡潔明快でエピソードも交へられ聴く者を倦ましめなかつた。

斯く我国昆虫学の創造者、指導者であるのみならず、多芸多才で豊かな人間味の持主でもあつた。学生時代には歌留多もやられ、相撲も強く、野球の選手、特に捕手であつて後年教授となられてからは永く野球部長を務められ、教授対学生試合にはいつも安打を飛ばされた。尺八も永年楽しまれ、同好の士女を集めて演奏会を開いておられた。銃猟、釣魚界の名士でもあつて、当時斯界の第一人者飯島魁先生とも行を共にされたが、やがて鳥に対しては残酷と感ぜれてやめられたが、釣は後年永く続けられた。撞球にも勝られ諸外国を撞いて廻られた。かように手をつけられたもの上達されぬはなかつた。座談の要も会得

され人を逸されなかつたし、また食通であり常においしそうに食べておられたし採集の際には可食野生輩の識別法や外国の珍しい食物の話を承つた。先生はまた非凡な健康体であられた、ただ一度大正の始め頃肋膜炎を病まれ数ヶ月転地療養された、後にこれは実に十二指腸虫と胸部に面疔の内攻とであつたと承つた。他に病気をされた記憶はない。

大成されてからは欧米に出張二回、ソ連邦に招かれ、南アジアに使され、外国学会の名誉会員に推されたりして、対外的に活躍されるし、他面には専門の書の他に多方面に亘る随筆を出された。その中には今は悲しい現実となつた樺太放棄論などもあり、これらに対し批判した人も出たが、先生の博識を裏書するに過ぎないものであつた。斯く華やかな反面御夫人や令嬢を亡くされる悲しい事や、外に心を労されることもなくはなかつたようである。しかし賢夫人モト女史と結ばれてからは内は安穩で、令息はなかつたが、外孫さん達の来られるを楽しみにされた。外では学士員会員に選ばれ、文化功労者に推される榮譽を担われ、偉大なる指導者にふさわしい晩年を送られた。斯くして昨夏米寿の御祝をされ、その秋病という程のこともなく静かに逝かれた。モト令夫人の御通知にあるとおり天寿を全うされたもので、追悼などという気持は起らない。大きな使命を完遂されて、ゆうゆう天国に昇られたのを御見送りした心地でいる。

松村松年博士略歴

- 1872 明治5年3月5日兵庫県明石郡明石町に生れる。
- 1888 札幌農学校予科に入学する。
- 1895 札幌農学校農学科を卒業する。次いで同校昆虫学研究生となる。
- 1896 札幌農学校助教授に就任する(7月29日)。
- 1897 「害虫駆除全書」を出版する。
- 1898 「日本昆虫学」を出版する。
- 1899 農学研究、主として害虫駆除法、益虫保護法及び養蜂論の研究のため満3ヶ年間ドイツ国へ留学を命ぜられ、ベルリン大学の H. J. Kolbe 教授並びにハンガリー国立博物館の G. Horváth 博士のもとで研究に従事する。1902年10月帰朝する。
- 1902 札幌農学校教授に就任する(12月1日)。
- 1903 東京帝国大学より理学博士の学位を授けられる。
- 1904 「日本千虫図解」第1巻を出版する。
- 1906-07 甘蔗害虫調査のため各年台湾へ出張する。
- 1907 東北帝国大学農科大学教授に就任し、動物学、昆虫学、養蜂学の第二講座を担当する。
- 1910 「大日本害虫全書」前編を出版する。
- 1912 勲六等に叙せられ、瑞宝章を授けられる。
- 1915 「大日本害虫全書」後編を出版する。
- 1918 北海道帝国大学農科大学教授に就任する。
- 1919 北海道帝国大学総長の推薦により農学博士の学位を授けられる。
- 1920-21 欧米各国に出張し、各国の昆虫学者との交流を深める。

1961

KONTYŪ

3

- 1921 「新千虫図解」第4巻を出版し、全12巻を完結する。
- 1925 万国昆虫学会議の名誉会員に推挙される。
ソ連科学院の賓客としてソ連に出張する。
- 1926 昆虫分類学雑誌「*Insecta Matsumurana*」を創刊する。
- 1928 バタビヤにて開催の第5回汎大洋洋学術会議に出席のためジャバ島へ出張する。
- 1929 日本昆虫学会の名誉会員に推挙される。
- 1931 「日本昆虫大図鑑」を出版する。
- 1931-32 欧州各国へ出張し、各国の昆虫学者との交流を深め、1932年パリーにて開催の第5回万国昆虫学会議に出席する。
- 1934 北海道帝国大学教授を依願退官する（4月24日）。
勅旨をもつて北海道帝国大学名誉教授の名称を授けられる（5月29日）。
- 1935-36 日本昆虫学会会長を勤める。
- 1938-40 日本応用昆虫学会会長を勤める。
- 1938 日本応用昆虫学会名誉会員に推挙される。
- 1940-41 日本昆虫学会会長を勤める。
- 1940-43 東亜文化協議会評議員総会へ出席並びに満洲の害虫調査のため各年渡満する。
- 1943-45 日本昆虫学会会長を勤める。
- 1950 日本学士院会員に推挙される。
- 1954 文化功労者に推挙される。
明石市名誉市民の名称を受ける。
- 1957 日本応用動物昆虫学会名誉会員に推挙される。
- 1960 昭和35年11月7日東京都渋谷区大山町の自宅において永眠する。同年12月2日
特旨をもつて勲一等に叙せられ瑞宝章を授けられる。

日本新記録のカミキリムシ

神 谷 寛 之

Chlorophorus sexmaculatus (Motschulsky, 1859) ムツボシアオコトラカミキリは今までアムール、満洲、蒙古、北支那及び樺太からの分布が知られていたが、この度、中尾舜一博士の北海道採集品中に本種が含まれていたため記録しておく。

1♀, Ashoro, Tokachi, Hokkaido, 4. vii. 1960, S. Nakao leg.

尚、上記標本は九州大学農学部昆虫学教室に保存されている。